

令和 8 年 度
宮崎国際大学 教育学部
一般選抜後期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

次の文章は、数多くの学校の教育改革に携わってきた石川一郎^{いしかわいちろう}さんが、今の子どもたちに身につけてほしいことについて述べたものです。石川さんの意見を250字程度で要約しなさい。また、石川さんの意見を踏まえた上で、あなたが先生になったとき、子どもたちの想像力を育むためにどのようなことをしてみたいと考えますか、要約と合わせて600字以内で述べなさい。

今の子どもたち — 予測不能ながら今より間違いなく激変する新しい時代の大人たちに、
“どうしても身につけてほしい、ことをお話ししたいと思います。

第一に必要なことは、子どもたちの「想像力」(イマジネーション)だ、と私は考えています。想像力とは「目に見えない像」(イメージ)を思い浮かべる能力です。

人間は生きていくあらゆる場面で想像力を使います。今日はどんな一日にしよう。夜は何を食べようか。あの人にこの話をしたらどうなるかしら。週末の旅行はどんな楽しい経験ができるかな。この学校に進んだらどんなことが待っているだろう。病気になったら。就職したら。恋愛したら。結婚したら。子どもが生まれたら……。

先のことはよくわからないから、人間はつねに想像力をめぐらせながら考えます。現時点で「正解がない」から想像するわけです。これは必ず「正解がある」テストを解くのと違います。正解があるなら、想像しなくても、自分の引き出しの中にあるものを引っ張り出して当てはめていけば、いずれ必要なものが見つかるでしょう。それはそれで大事なことです。が、「その先を考えよう」というのが想像力です。

では、想像力はただの思いつきなのでしょうか。もちろん想像力にも知識や経験が必要です。知識や経験が豊かであればあるほど、想像力も大きく広く働く余地があるでしょう。逆にいうと、まったく未知で未経験なものの像 — 姿や形というのは、思い浮かべることができないはずですよ。

それでも私たちが、この世に存在していないもの、あるいは実現されていない未来についてのイメージを、なんとなく描くことができるのは、なぜでしょう。そのイメージは、無数のおぼろげな記憶や経験がデタラメに切り貼りされ、合成されたものかもしれません。過去のある経験が、何か突拍子もないものの記憶とくっついて再構成され、見たこともないイメージに変容されて出てくるのかもしれません。これは「夢」に近いでしょうし、「妄想」にも近いでしょう。

昆虫を研究する生物学者たちが、いろいろな虫に同じような構造や器官があると気づいたが、あれこれ想像をめぐらせてもどんな働きをするのかさっぱりわからず、頭を悩ませていたそうです。すると、生物学にまったくド素人のエンジニアが、図を一瞥^{いちべつ}しただけで「これ、冷却装置ですね」と断言した、という話があります。

想像力を働かせて、面白い発想や優れたアイデアが出てくるときは、頭の中でそんな大きな飛躍 — 物事を考える“常識”とされている領域や壁のようなものを一気に飛び越える、

記憶や経験の組み替えが起こっているのかもしれませんが、これこそが、「こんな見方もあるのかな」とか「こうだったら面白い」という、クリティカル、クリエイティブシンキングです。

だからこそ、想像力を働かせた子どもが「こうじゃないの？」というとき、「何バカなことってんの」と否定してはダメです。大人からすれば、それが夢や妄想としか思えなかったとしても、です。どうか子どもには「なるほど、面白いねえ。どうしてそう思うの？」と問いかけ、自由闊達^{かったつ}に対話してください。そうすれば子どもの想像力が深堀りされていき、より鮮明な像を結んだり、想像が広がって、また異なる像が得られたりするでしょう。

子どもがぼうっとしているように見えて、考えをめぐらせあれこれ想像するのは、決してムダではありません。夢や妄想のようなことを口にする、一見ムダなことを考える人間こそ必要とされる時代が、目前に迫っています。「余計なこと考えないで、いわれたことをやりましょう」といって背中を押し続けるだけでは、未来の社会を生きていくには何か物足りなくなるのは間違いありません。子どもが好き勝手に思いをめぐらせ想像でき、どんな思いつきも口にできる“自由、な環境づくりを心がけてほしいと思います。

想像のなかから何か気になるもの、引っかかるものが出てきて、「これ好きだな」「面白いぞ」と思って表現していく。そんな楽しいプロセスこそが、新しい創造をもたらします。想像力は創造性（クリエイティブ）の土台となる力なのです。

（石川一郎『2020年からの新しい学力』による・一部省略がある）